



TITLE:

われもまたインドに至らん 一近  
世ポーランドにおける「新世界」  
認識とウクライナ植民論一

AUTHOR(S):

小山, 哲

---

CITATION:

小山, 哲. われもまたインドに至らん 一近世ポーランドにおける「新世界」認識とウクライナ植民論一. 人文學報 2001, 85: 1-25

ISSUE DATE:

2001-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/48573>

RIGHT:

## われらもまたインドに至らん

—— 近世ポーランドにおける「新世界」認識とウクライナ植民論 ——

小 山 哲

1. 「ヨーロッパの拡大」の西と東
2. ルネサンス期のポーランドにおける「新世界」認識
3. ウクライナ植民論の系譜 (1) —— 東南方辺境防衛論
4. ウクライナ植民論の系譜 (2) —— 軍事・農業植民論
5. 空間認識とプロパガンダ—— 結びにかえて

「東方には、インドに至るまで、無人の土地や、零細な領主が住む土地がたくさんあり、希望をもってやって来る無数の人びとをそこに入植させることができる」。

ビョートル・グラボフスキ『ポルスカ・ニジナ、あるいはポーランドの入植地』(1596年刊)

### 1. 「ヨーロッパの拡大」の西と東

中世末から近世にかけてのヨーロッパ世界の拡大について考えるとき、行く先が東インドであれ西インドであれ、私たちは大西洋の大海原を思い浮かべがちである。しかし、同じ時代にヨーロッパ世界経済の東の辺境に広がる大地でも外に向かって膨張する動きがみられたことは、少なくとも日本ではこれまであまり注目されることがなかった<sup>1)</sup>。

この問題について、ポーランドの経済史家マリアン・マウウォヴィストが、1962年の『年報——<sup>アナル</sup>経済・文明・社会』誌に、短いが興味深い論考を寄せている。題して、「比較史の試み——15・16世紀のヨーロッパにおける拡大の動き」という<sup>2)</sup>。日本語に訳すとわからなくなってしまうが、原題の「拡大の動き」(movements d'expansion)が複数形になっている点が、じつは重要である。ヨーロッパでは、中世末から近世初頭にかけて、封建的支配層の経済的危機と人口増大にともなって、各地域でさまざまな方向に向かう拡大の動きがみられた。マウウォヴィストがとくに注目するのは、イベリア半島から西へ向かう海外発展と、東中欧地域から東に向かう人口移動との並行性である。とくにポーランドでは、貴族層を中心に、16世紀後半から17世紀初頭にかけてウクライナ、リヴォニア、モスクワへの進出が続いた。しかし、16世紀末以降、

北西ヨーロッパ諸国——オランダ、イギリス、フランス——が海外に積極的に進出しはじめると、先行して領域を拡大した南西ヨーロッパと東ヨーロッパの諸国は、経済的により発展した後発の諸国によってむしろ間接的に搾取されるようになるとマウオヴィストは考えた<sup>3)</sup>。

この『年報』の論考の3年後に発表された論文「東欧とイベリア諸国——類似点と相違点」<sup>4)</sup>では、ヨーロッパの東西両方向への拡大を並行する現象としてとらえるマウオヴィストの視点は、いっそう明確に示されている。ポルトガル、スペインの海外発展とポーランドの東方植民は、ともに貴族層を主たる担い手とし、進出した先の地域に強制労働にもとづくモノカルチャー的な生産体制（ラテンアメリカの奴隷制、ウクライナの賦役農場制）を導入した点で、共通する面をもっていた。これらの諸国は、広大な領土を支配下に置きながら、生産の効率を向上させることができず、植民地の資源を国内の工業化に有効に動員することもできなかった。その結果、東欧と南西欧（後者はその延長としてラテンアメリカとアフリカを含む）は、16世紀末以降、ヨーロッパの二大「低開発」地域となるに至った、とマウオヴィストは指摘する<sup>5)</sup>。

イベリア諸国と東欧、とくにスペインとポーランドの歴史発展を比較する議論は、ポーランド史学においては、19世紀前半のヨアヒム・レレヴェル<sup>6)</sup>以来の伝統がある。ヨーロッパの西と東で近世の大国が衰退にむかった原因を比較史的に究明しようとしたレレヴェルの構想は当時としては斬新なものであった<sup>7)</sup>が、彼の主たる関心は、両国の国制、文化、隣国との関係（スペインの場合はフランス、ポーランドの場合はロシア）の比較に向けられていた。このため植民地への言及はほとんどなく、「〔スペイン領では〕アメリカの住民が滅ぼされ、〔ポーランドでは〕タタールが制圧された」という類似の指摘が目にとまる程度である<sup>8)</sup>。その後、多くの研究者の関心を集めたのは、両国のキリスト教世界（反宗教改革期にはカトリック世界）の辺境としての性格に由来する文化的な同質性であった<sup>9)</sup>。20世紀後半の研究としては、アーヴィン・C・ブロディが近世の両国の文化的交流を概観している<sup>10)</sup>ほか、ヤヌシュ・タズビルが、やはり文化史的な観点から、両国の領土拡大の担い手——シュラフタ（ポーランドの貴族身分）とコンキスタドーレス——を比較して論じている<sup>11)</sup>。こうした一連の比較史論の系譜のなかで、マウオヴィストの研究の特色は、社会経済史的な視角から両地域の共通性を浮かび上がらせた点にあるといえよう。マウオヴィストは、中世末から近世にかけてヨーロッパの東西の辺境地域で植民を伴いながら進行した支配領域の拡大と、これらの地域の低開発化・経済的従属化とのあいだに、構造的な連関がみられることを明らかにした。この見解は、のちにイマニュエル・ウォーラーステインが世界システム論を構想するにあたって、重要な示唆を与えることになった<sup>12)</sup>。

しかし、16世紀にヨーロッパの西と東の端で同じように外へ向かう動きが起っていることは、同時代のポーランド＝リトアニア国家（「共和国」Rzeczpospolita<sup>13)</sup>）の住民たちによってすでに認識されていた。以下にみるように、彼らは、自国で生じている事態を、しばしば西欧

諸国による「インド」征服になぞらえて議論しているのである。マウヴォイストは東西の拡大運動の同時性と構造的な類似性を強調するあまりさほど重視していないが、ポーランドの東方への拡大運動がピークに達するのは、「大航海時代」の幕開けから約1世紀遅れて、ようやく16世紀末から17世紀前半にかけてのことであった。したがって、東方進出を唱えるポーランド側の論者は、いちはやく海外に進出したポルトガルやスペインはもちろん、遅れて植民地の獲得に乗り出したオランダやイギリスの事例さえも、先行するモデルとして参照することができる立場にあったのである<sup>14)</sup>。ヨーロッパ世界経済の東部辺境における拡大運動の歴史的性格を考えるさいに、この「タイム・ラグ」を無視することは適切とはいえないであろう。同じヨーロッパ世界経済のなかで示された先例は、遅れて同様の課題に直面した国家の成員の行動を方向づけるうえで、一定の役割をはたしうるだろうからである。

16世紀をつうじて、ポーランド人は、大西洋の彼方ですでに始まっていた「ヨーロッパの拡大」についてどのような認識をもっていたのだろうか。彼らの空間認識は、ポーランド国家の東方への拡大を説く言説にどのような影響を与えたのだろうか。東方進出を促す言論と、現実に進められた軍事的拡大や植民活動とのあいだには、どのような対応関係が認められるだろうか。本稿では、16世紀から17世紀前半にかけて書かれた一連の東方植民論に焦点をあてながら、これらの問題について考えてみたい。

## 2. ルネサンス期のポーランドにおける「新世界」認識

大西洋の彼方で「発見」された「新世界」にかんする情報は、ラテン文化圏の東の辺境に位置するポーランドの人びとに、どのような伝達経路をへて伝えられたのか。また、新たに「発見」された空間にかんする彼らの認識は、どの程度正確なものだったのか。ポーランド人自身の東方植民論を検討する前に、これらの点を概観しておこう。

イベリア諸国の海外進出にかんする情報は、ポーランドには15世紀末から16世紀初頭にかけて、複数の媒体をつうじてもたらされた。比較的早い段階から「新世界」の存在を伝えていたのは、西欧から輸入される出版物である。たとえば、西回りの「インド」航路発見を伝えるコロンブスの書簡(1493年刊)は、そのドイツ語訳(シュトラスブルク、1497年刊)がポーランド王国領内のバルト海沿岸地域に流布していた<sup>15)</sup>。また、地理学、天文学、医学など多方面にわたって活躍した人文主義者マチェイ・ズ・ミエホヴァ(ミエホヴィータ) Maciej z Miechowa (Miechowita) の蔵書には、「新世界」についての言及を含むザカリアス・リリオ Zacharias Lilioの著書『地球抄説』*Orbis breuiarium* (おそらく1500年のヴェネツィア版)が含まれていた<sup>16)</sup>。これ以外にも、クラクフ大学の関係者が、アメリゴ・ヴェスプッチの報告を含むマルティン・ヴァルトゼーミュラー Martin Waldseemüller『地理誌入門』*Cosmographiae intro-*

*ductio* (1507年版)を所有していた事例が知られている<sup>17)</sup>。

クラクフ大学は当時、ヤン・ズ・グウォゴヴァ Jan z Głogowa, マチェイ・ズ・ミェホヴァ, ヤン・ゼ・ストブニツィ Jan ze Stobnicy, ミコワイ・コペルニク (コペルニクス) Mikołaj Kopernik らを擁する地理学研究の中心であり、「新世界」にかんする情報をいち早く伝える重要な窓口でもあった。知られているかぎりで新大陸についての最も早い言及は、1501年にヤン・ズ・グウォゴヴァが著した天文学書にみられる<sup>18)</sup>。彼は1506年にクラクフ大学で行なった講義<sup>19)</sup>でも、次のようにポルトガルによる「新世界」発見に触れている。「1501年、また1504年にも同様に、ポルトガル王によって、世界の島々、ことに胡椒やその他の高貴な香料の原産地を探求するために使節が派遣された。[...]そして、新世界 (*novus mundus*) と呼ばれる土地で、胡椒の原産地を探しあてた。この土地は、以前はまったく知られていなかった場所である」<sup>20)</sup>。この「新世界と呼ばれる土地」は東・西インドのいずれを指すのか曖昧であるが<sup>21)</sup>、多くの研究者はこの箇所がアメリカ大陸を念頭において書かれたものと推測している<sup>22)</sup>。

同じクラクフ大学の地理学者ヤン・ゼ・ストブニツィは、1512年に刊行された『プトレマイオス地理誌入門』*Introductio in Ptholomei Cosmographiam* のなかで明確にアメリカを指して「新世界」と呼んでいるが、コロンブスには言及せず、ヴェスプッチを新大陸の発見者とみなしている<sup>23)</sup>。同様の見方は、コペルニクスの有名な『天球回転論』*De revolutionibus orbium coelestium* (1543年刊)の序文にもみられる。「もしもわれわれの時代にスペインとポルトガルの支配者たちによって発見された島々、とくに発見者である船隊指揮官にちなんで名づけられたアメリカを加えてよいならば、[大洋よりも陸地の占める経度の割合はいっそう大きくなるであろう]。今もって不確かなその大きさのゆえに、以前は知られていなかった他の多くの島々とは別に、人びとはそれをもうひとつの陸地界とみなしている」<sup>24)</sup>。この誤解は、はじめてポーランド語によって「地理上の発見」について詳細な記述をおこなったマルチン・ビェルスキ Marcin Bielskiの『全世界年代記』*Kronika wszytkiego świata* (1551年初版刊行)にも引き継がれた。著者ビェルスキは「新世界」(*Nowy Świat*)という概念を東西インドを含む広い意味で用いているが、アメリカについては「最近、主の年の1497年にスペイン国王の命令によりスペイン人ヴェスプッチによって発見された」と記している<sup>25)</sup>。

しかし、同じ年代記の1554年以降の版では、ビェルスキは、とくに1章を設けてコロンブスの航海について詳しく記述している(第10巻第1章「クリストファー・コロンブスの航海について」)<sup>26)</sup>。ビェルスキの叙述には、新しい知見を正確に伝えようとする姿勢と、ヨーロッパ外の世界を怪異な現象に満ちた空間として描く伝統的なスタイルとが混在している。著者は、たとえばコロンブスの第3次航海における航海者同士の対立の経緯を、当事者双方の主張を引用しながら客観的に叙述する<sup>27)</sup>一方で、コロンブスやマゼランの航海の記述のなかに、女人島

や巨人国など中世の旅行記にしばしばみられる幻想的なトポスを織り込んでいる<sup>28)</sup>。また、「新世界」の住民については、裸体での生活、身体装飾、食人の風習など、エキゾティックな側面を誇張して描いている。たとえばカニバリズムについては、次のような記述がみられる。「彼らは人間の肉を食べるが、そのやり方ははなはだ非道である。父親が老いると、息子たちが彼を食べる。父親も、息子の性質や育ちが悪いと、これを食べる。私たちは、煙製になった人間の肉がたくさん吊り下げられているのを目にした。私たちが人間の体を食べたがらないことに驚いた彼らは、これこそこの世で一番のご馳走なのに、と言った」<sup>29)</sup>。

『全世界年代記』は増補されながら版を重ね (1551 年, 1554 年, 1564 年), ポーランド語による世界史や地理にかんする情報源として、シュラフタ層を中心に多くの読者に迎えられた<sup>30)</sup>。それだけでなく、ビェルスキの年代記は16世紀末にロシア語に訳され、「新世界」にかんする部分はイシュトヴァーン・セーケリ István Székely によるハンガリー語の年代記 (1569 年刊) にも転用された<sup>31)</sup>。他方で、『全世界年代記』の「新世界」にかんする叙述はビェルスキの独創ではなく、16 世紀前半から半ばにかけてバーゼルで刊行されたジーモン・グリュナエウス Simon Grynaeus やゼバスティアン・ミュンスター Sebastian Münster の地理書の翻案であることがわかっている<sup>32)</sup>。つまり、ビェルスキの年代記は、西欧で出版された書物に記された「地理上の発見」の知識を要約してポーランド語圏の読者に提供する一方で、翻訳をつうじてヨーロッパ東部の他の地域に「新世界」情報を伝える媒介としての役割をもはたしたのである。

「新世界」の情報を伝える書物としては、これ以外にゴンザロ・フェルナンデス・デ・オヴィエド Gonzalo Fernández de Oviedo, ジェロラモ・ベンゾーニ Gerolamo Benzóni, ホセ・デ・アコスタ José de Acosta らの著書が読まれた<sup>33)</sup>。ほか、17 世紀にはいるとジョヴァンニ・ボテロ Giovanni Botero の『世界報告』*Relazioni universali* (1591 年刊) がポーランド語に訳されて版を重ねた (1609, 1613, 1659 年)<sup>34)</sup>。翻訳者パーヴェウ・ウェンチツキ Paweł Łęczycki はシトー会の修道士で、1606年にポーランド国王ジグムント 3 世によってモスクワに派遣された使節団に同行したさいに 2 年間にわたって監禁され、その間に翻訳を完成した<sup>35)</sup>。序文において、訳者はコロンブスやヴェスプッチの功績を称えるだけでなく、16 世紀末から本格化しつつあったイギリスやオランダの海外進出についても、次のように肯定的に記述している。「イギリスのエリザベス女王の治世に、フランシス・ドレーク Franciscus Dracus が航海を試み、1580年に帰還した。また、彼に続いて、トマス・キャヴェンディッシュ Tomasz Candish が 1588年に航海をおこなった。最後に、ごく最近、オリヴァリウス・ア・ノルト・ウルトラリエクトゥス Olivarius a Nord Ultraiectus が、1598 年 7 月 2 日にオランダから出航し、4 年目の 8 月 25 日に帰航した。これらの者たちはみな、その自らの旅行によって永遠の榮譽を手にしただけでなく、人間になにができるか、人間の本性はなにを目指すものかを示したのである」<sup>36)</sup>。1606 年のモスクワへの使節派遣自体が、この時期のポーランド国家

の東方への軍事的膨張の一環であったことを念頭におくならば、ウェンチツキがモスクワの地でこの翻訳に取り組んだことはたんなる気まぐれではなかったであろう<sup>37)</sup>。

活字以外の「新世界」についての情報源としては、書簡、地図、西欧への旅行者・留学者の見聞、カトリック教会の情報網などが挙げられる。

16世紀前半の段階でポーランド宮廷にとって貴重な情報をもたらしたのは、国王秘書官として外交の舞台で活躍したヤン・ダンティシェク Jan Dantyszek (Dantiscus) であった。外交使節としてネーデルラント、スペイン、イギリスに派遣されたダンティシェクは大西洋岸の諸国の情勢に詳しく、メキシコを征服したエルナン・コルテスとも親交があった<sup>38)</sup>。ダンティシェクは新大陸にいるコルテスとのあいだで文通を交わしており、「ペルー」、「アルゼンチン」、「ラプラタ川」などの地名をはじめポーランドに伝えたのも、この国王秘書官であったと考えられている<sup>39)</sup>。「新世界」情報を含むダンティシェクの報告は、しばしばポーランドの宮廷内で回覧され、筆写された。好奇心をかきたてられたクラクフ城代クシシトフ・シドウォヴィェツキ Krzysztof Szydłowiecki は、コルテスが発見した島〔!〕から「インド人」を送ってほしい、とダンティシェクに書き送っている<sup>40)</sup>。

旅行者にかんしては、ポーランドから新大陸に渡った者は16世紀の段階ではごく限られており、直接の見聞による知識の普及は期待できない<sup>41)</sup>。しかし、16世紀をつうじて、シュラフタはドイツ、イタリア、フランスなど西欧諸国に盛んに子弟を留学させており<sup>42)</sup>、旅先で新たに「発見」された「インド」について間接的に聞き知った者は少なくなかったであろう。たとえば、16世紀末にスペインを旅した匿名のポーランド人は、旅日記にコロンブスに同情的な記述を残している。「イタリア人でジェノヴァの人、クリストファー・コロンブスは、この年、西インド Indias Occidentales を発見したのち、1493年にここバルセロナの彼〔国王フェルナンド〕のもとに到着した。そして、彼に6名のインド人、金、銀、真珠、その他多くのものをもたらし、〔…〕そのために感謝をもって迎えられ、尊敬され、高位、財産、称号、紋章を授けられた。しかるにこの幸いは、この男になにをもたらしたか。これらの贈り物の代償に1499年、彼はまったく無実であるのに鎖につながれ、弟とともに獄に入れられ、インドから連れてこられた犬のように糞にまみれた姿で国王の前に引き立てられたのである」<sup>43)</sup>。

カトリック教会も、「新世界」にかんする知識が普及するうえで無視しえない役割をはたした。ポルトガル、スペインによる「ヨーロッパの拡大」は同時にカトリック世界の拡大でもあり、ローマ教会は、宗教改革によってヨーロッパ大陸の内部で失われた権威を埋め合わせる意味でも、「新世界」での布教の成果を強調したのである<sup>44)</sup>。とくにイエズス会は海外布教の宣伝に熱心であり、布教活動の様子を伝える宣教師たちの「報告」や「書簡」は、ポーランドでもよく読まれた<sup>45)</sup>。海外で殉教した修道士は列聖されて崇拜の対象となり、宗教画や説教の題材となった。カトリック教会の聖職者は、一般の人びとにとって最も身近な「情報通」であ

り、彼らの説教は、地域社会の外で起こる出来事についてのニュースを伝達する場でもあった。16世紀後半のポーランド・カトリック教会の東方政策に大きな影響を及ぼしたイエズス会士ピョートル・スカルガPiotr Skargaも、説教や著作のなかでしばしば「新世界」の状況に言及している。スカルガは、説教のなかでこう呼びかけている。「日本、中国、東インド、ペルー、アメリカ、ブラジル、メキシコ、その他のさまざまな大きな異教徒の王国でなにが起こっているか知りたいと望む者は、訊ねるがよい、そして読むがよい」<sup>46)</sup>。ポーランド各地に設立されたイエズス会のコレギウムでも、教育の一環として、海外伝道に題材をとった宗教劇が生徒たちによって上演された。リアリティを出すために、舞台道具や衣装のデザインには、宣教師たちが現地から持ち帰った衣服や装飾が参照された<sup>47)</sup>。イエズス会が主催する宗教行事でも、カトリック布教の空間的広がり誇示された。たとえば、17世紀前半のヴィルノでは、宗教行列にさいして、擬人化された「アフリカ」、「アジア」、「ヨーロッパ」、「アメリカ」の四大陸が、勝ち誇る「神の摂理」を取り囲むという演出が施されている<sup>48)</sup>。このような視覚的手段を動員したプロパガンダは、活字による知識の伝達以上に、幅広い社会層に働きかける効果をもった<sup>49)</sup>。

このように「新世界」にかんする情報は、さまざまな媒体をつうじてラテン文化圏の東の辺境にも伝えられた。書物に親しんでいる者であれば、多少の時差を伴いながらも、ポーランドに居ながらにして「地理上の発見」の概略をつかむことができたのである。とはいえ、西欧諸国に比べれば情報量が相対的に少ないことは否定できないし、二次的情報を鋏と糊でつなぎ合わせた「新世界」像は断片的であり、しばしば不正確であった。ポーランド語の「新世界」(Nowy Świat)・「インド」(Indie)という用語自体、16世紀の段階ではなお多義的であり、その地理的範囲は文脈によって揺れ動いた<sup>50)</sup>。そういう意味では、ルネサンス期のポーランド人にとって大西洋の彼方の世界は遠く、その実体は漠然としており、輪郭は曖昧であった。

しかし、その一方で、じつは自分たちの身近にも「新世界」があるのではないか、という発想も、かなり早い時期に芽生えつつあった。ヨーロッパ東部地域の最初の本格的な地誌『両サルマチア論』(1517年刊)を著したマチェイ・ズ・ミェホヴァは、その巻頭に置かれた献辞を次のように結んでいる。「ポルトガル国王は、インドや大洋の彼方に人びとが暮す地域にまで広がる、世界の南の部分の世に知らしめました。同様に、北の大洋の岸に暮す人びとのいる世界の北の部分や、ポーランド国王がその武器と戦争によって到達するにいたったさらに東方の地が、万人の目に開かれますように」<sup>51)</sup>。ここでは、「サルマチア」は、ヨーロッパの東に広がる、もうひとつの魅力的な「新世界」として位置づけられている<sup>52)</sup>。

ポーランドの東部辺境にこそ「もうひとつのインド」があるという考え方は、16世紀後半にはイエズス会とポーランド王権が共有する理念となった。ポーランドのイエズス会にとっては、共和国内部の東方正教会の信徒をローマの影響下にとり込むことが、重要な活動の目標と



なった。それはおのずと共和国の東部地域に新たなカトリック布教の前線を築くことを意味した。ポーランドにイエズス会が導入された1564年、あるイエズス会士はヴィルノ司教に対して、ポーランドこそは「北インド」となりうるかと力説している<sup>53)</sup>。ピョートル・スカルガもまた、1573年に「われわれは東インドも西インドも必要としない。リトアニアと北方の地こそが真のインドである」とオーストリア管区長に宛てた書簡に記した<sup>54)</sup>。6年後、共和国東方のポヴォツクの領有をめぐるモスクワ大公国と争い、この都市を攻囲のうえに占領した国王ステファン・バトーリは、スカルガに宛てて次のように書き送っている。「汝らは、アジアやアメリカで異教徒の世界を神のもとへと教え導いたことで、汝らのポルトガル人やスペイン人の仲間を羨むことはない。ここ、身近なポヴォツクのルシの民のなかに、神の御業に気がついていないこの町のなかに、インドや日本があるからである」<sup>55)</sup>。こうして、東方の領土を維持・拡大しようとする王権の利害と、東方への布教を掲げるイエズス会の方針とは重なり合った。

大西洋の彼方の「インド」の輪郭が漠然としていたように、この身近な「もうひとつのインド」も、地図上でその範囲をひとつに特定することはできない。それは、リトアニアのように共和国の領土の内部にあるか、ポヴォツクのように領土的帰属をめぐる係争中の地域であるかを問わず、豊かな資源が十分に開発されぬままに眠っていると考えられる東方の空間を意味していたからである。

ポーランド王国領の東南部に広がるウクライナ<sup>56)</sup>は、想定されうるいくつかの「もうひとつのインド」のなかでも、当時のポーランド貴族にとって最も可能性に満ちた空間であり、じつさに長期にわたってポーランド王国領の中心部からの入植が進んだ地域でもあった。次に、16世紀後半に唱えられた一連のウクライナ植民論の内容を検討しながら、シュラフタ層がこの身近な「新世界」になにを求めていたのかを探ってみよう。

### 3. ウクライナ植民論の系譜（1）—— 東南方辺境防衛論

ウクライナを含むポーランド王国領の東南部辺境地域<sup>57)</sup>は、共和国の為政者にとって、16世紀をつうじてつねに問題をはらんだ領域であった。カルパチア山脈の北東山麓から黒海北岸にかけて広がるこの地域には未開拓の沃野が広がっていたが、キリスト教圏とイスラム教圏の境界領域に位置していることもあって、その支配は、政治的・軍事的にきわめて不安定であった。1475年にオスマン帝国に服属した黒海北岸のクリミア・タタールは、たびたびポーランド＝リトアニア領内の奥深くまで攻め込み、略奪を繰り返した。この地域に恒常的な防衛体制を構築し、また、そのための財源を確保することは、この時期の共和国にとって重要な政策的課題のひとつであった。

すでに1470年代から、東南方辺境地域に兵力を常駐させる構想が身分集会の議題にのぼる

ようになり、国王ヤン・オルブラフトの治世(1492-1501年)には騎兵数千からなる通常防衛軍(*obrona potoczna*)が組織された<sup>58)</sup>。この方針は続くアレクサンデル(在位1501-1506年)、ジグムント1世(在位1506-1548年)の治世期にも継承されたが、軍を常駐させるための財源の確保は容易ではなく、資金が不足するたびに辺境地域の兵力は激減した<sup>59)</sup>。ようやくジグムント2世アウグスト治世期の「執行」議会(1562-63年)において、王領地収入の4分の1(*kwarta*)を通常防衛に充当することが決議され、一定の財源が確保された<sup>60)</sup>が、広大な辺境地域の軍事的安定を保つためにはけっして十分とはいえなかった。東南方辺境地域にシュラフタ層を入植させ、辺境防衛の担い手としようとする構想は、このような背景のもとで生まれた。

「執行」議会の改革に先立って、16世紀のポーランドを代表する人文主義者アンジェイ・フリチ＝モドジェフスキ Andrzej Frycz Modrzewski は、5巻からなる『国家改革論』*Commentariorum de Republica emendanda libri quinque* (1551年刊)の第3巻「戦争論」において、イスラム勢力に対する国土防衛を主眼とする軍事・財政改革構想を提起している<sup>61)</sup>。そこで提案された一連の国境防衛策のなかに、貧困シュラフタを辺境地域に入植させて防御線を構築するアイディアがみられる。「わが国には、子どもが多いために、貴族身分にふさわしい生活をするのがむずかしく、また、貧しいためにシュラフタの威信に見合った戦争の準備ができないようなシュラフタの一族がたくさんある。これらの一族のなかには、祖先が勇敢だったことで誉れ高く、いったん長い戦争が起これば、さぞかし兵の業で名を上げるであろう者たちも数多い。どうして辺境の地に、これらの人びとから成る入植地を作らないのであろうか。どうして彼らに一定の土地を与えて、戦時にはわれわれの兵士たちの避難先となるような城塞をそこに構築しないのであろうか。彼らは、見張り台から眺めるように、そこから敵の接近の様子を追うことができ、味方の軍隊が援護にやってくる前に敵の最初の攻撃をくいとめたり、撃退したりできるであろう。じっさい、この種の城塞が、互いになにをなすべきかを速やかに了解でき、指揮官たちが容易に集合できるように数マイルごとに数多く築かれるならば、効果的に、またきわめて強力に敵の行く手をさえぎり、妨げることができるであろうと私は考える。また、武勇を世に示すための広大な地が開け、生活に必要なあらゆるものが十分にあるこのような場所が、どうして兵の魂をもった人びとを引きつけないことがあろうか。これらの地は、蜜も、牛も、野獣も、あらゆる種類の穀物も、驚くほど豊富である」<sup>62)</sup>。

フリチ＝モドジェフスキのこの提案は、1590年代の本格的な東方植民論に時期的に40年以上先駆けているだけでなく、シュラフタ層の人口圧と貧窮化、辺境への入植による国境防衛の強化、辺境地域の豊かな資源への着目など、のちのウクライナ植民論の要点をすでに凝縮して示している点でも、注目に値する。

当時、「蜜の流れる地」としての東南方辺境地域のイメージが広く共有されていたことは、

ヤン・モンチンスキ Jan Maczyński の編纂した『ラテン語－ポーランド語辞典』(1564 年刊)の語義の説明からもうかがうことができる。たとえば「ルテニア人」(Ruteni) の項目には、次のように記されている。「ポーランド国王に服する〔ルテニア〕公領は、穀物、魚、牛、蜜、蠟、馬、河川によって驚くほど肥沃である」<sup>63)</sup>。また、モンチンスキは「植民者〔植民地〕」(Colonia) の項目に「ポドレに植民者を送る」(Mittere coloniam in Podoliam) という例文を掲げ、「ポドレに居住してタタールから守らせるために、相当数の軍勢を送って住まわせること」と説明している<sup>64)</sup>。この用例は、この時期の「植民」概念が、東南方辺境の軍事防衛と密接に結びついていたことをよく示している。

その後、イスラム勢力に対する軍事防衛を主眼とする東南方地域の植民論をより具体的なかたちで展開したのは、キエフ司教ユーゼフ・ヴェレシチンスキ Józef Wereszczyński であった。ヴェレシチンスキは、1594 年に書かれた『公共の利益』*Publika* のなかで、ウクライナに騎士学校と騎士団を創設し、シュラフタ子弟に軍事訓練を施すと同時に、辺境防衛の主力とする構想をうちだしている。「愛しき黄金のウクライナ」(miła złota Ukraina) を異教徒の侵略から守るために、キエフ司教はまず、ウクライナに騎士学校 (kollegium rycerskie, to jest rycerska szkoła) を設立して、シュラフタの子弟 1 万人を送りこむことを提案する<sup>65)</sup>。もしこのような学校が設置されれば、つねに 1 万の兵力がウクライナに常駐することによって防衛力が強化されるだけでなく、行き場のないシュラフタの青年たちを吸収することができる。「もはやこれ以上、愛する自らの子孫が、(両親に少なからぬ迷惑をかけながら) 家で無為にぶらぶらと過ごすことを望まないのならば、また、家で怠惰に過ごすことによって、無為こそ悪徳のもと (otia dant vitia) であるがゆえに、愛する両親がこつこつと築いたものを無駄に浪費してしまうことを望まないのならば、青年時代を家で無益に過ごさないように、遠方まで放浪して愛する両親にひどい恥をかかせることがないようにするべきである。彼らは、このような品位のある、しかも国家にとって有益な騎士学校において、青年時代を過ごすべきなのである」<sup>66)</sup>。

前節でも触れたように、当時、シュラフタは子弟をしばしば西欧諸国に留学させていたが、ヴェレシチンスキは、外国留学に多額の出費をするよりも、ウクライナの騎士学校を援助するほうが「公益」にかなっていると指摘する。「国家への敬愛の念からも、最愛の息子への愛情からも、自分の子供をどこかの学校や大学へ、さらには外国へと送り出すのに、それにふさわしいだけの備えを家から用立ててやらないような怠惰な父親はいないと私は信じる。そして、もし自分の息子の私益 (prywatna) のためにそれだけのことをしてやるのなら、徳のある父親ならばだれでも、むしろ最愛の祖国のためにこそ、はるかに多くのものを用立ててやるべきである。そうすれば、最愛の祖国が王国の敵たちから少なからず守られるだけでなく、かの騎士学校もまた、貧しい人びとを略奪して悲嘆の叫びをあげさせることなく、現世で生き延びるこ

とができよう」<sup>67)</sup>。ちなみに、騎士学校の財源としては、ルシ地方の王領地収入の4分の1 (いわゆる kwarta) に加えて、聖俗領主の収入の10分の1と酒税 (czopowe) が充てられ、さらに教官の給与は、王権の関税収入 (cło, myto) から捻出されることになっていた<sup>68)</sup>。

キエフ司教の構想では、騎士学校の門は、シュラフタの子弟だけでなく、平民にも開かれていた。ただし、都市民・農民の参加経費は各都市・村の負担となる。彼らは、少なくとも兵力1万の「選抜歩兵軍」(wojsko wybrańców) を構成し、軍功を積み重ねれば軍司令官の推薦によってシュラフタ身分への上昇も認められるはずであった<sup>69)</sup>。

ヴェレシチンスキは、騎士学校とは別に、ザドニェプシェ (Zadnieprze) に騎士団を創設することも提案している<sup>70)</sup>。ザドニェプシェは、ドニエプル川の左岸地域 (いわゆる「左岸ウクライナ」) に相当する。ここは、ウクライナ地方のなかでもポーランド王国領の中心部から最も遠く、したがってまた中央からの統制が最も及びにくい地域であった。この地域には、「現在、部分的に入植がはじまっているが、いまだ国王陛下もポーランド王冠も、そこから100ズウォティの利益も得ていない」<sup>71)</sup>。各地の城塞も荒廃したまま放置され、「熊や狼や野豚がそこで子供を産む」状態であった<sup>72)</sup>。ヴェレシチンスキによれば、ザドニェプシェに置かれる騎士団は、兵力6,000、火炮を装備し、団員は褐色の十字の付いた赤い長袖服を制服として着用することになっていた<sup>73)</sup>。騎士団の任務は、「キリスト教徒を異教徒から守り、異教徒を鎮圧する」ことにあり、財源には、ユダヤ人、アルメニア人、ロマ、ユダヤ人に仕えるキリスト教徒から徴収する人頭税が充てられる。共和国内の非キリスト教住民の出費によって国外の非キリスト教勢力と戦う組織を維持するこの着想を、キエフ司教は「錬金術」(alchimija) と呼んで自賛している<sup>74)</sup>。

騎士学校と騎士団の追加的な財源としては、さらにバルト海沿岸の港湾都市 (グダンスク、リガ、エルブロンク、クルーレヴィエツ) からの資金供出、モスクワ・キエフ間の交易ルートであるドニエプル川とデスナ川の関税収入、遺贈される所領や修道院財産などが充てられる<sup>75)</sup>。また、毎年、1～2県が当番制で軍事的警戒体制を敷き、各県が時期をずらして年4回の閲兵 (okazja) をおこなえば、共和国全体でつねに臨戦体制を維持することができるとヴェレシチンスキは主張する<sup>76)</sup>。

定期的な閲兵の実施や、各地域交代制による辺境防衛の構想は、16世紀中葉のフリチ＝モドジェフスキやスタニスワフ・オジェホフスキの国家論にすでにみられる<sup>77)</sup>。また、シュラフタ子弟の余剰人口を辺境地域に入植させ、軍事教育を施しながら辺境防備の担い手とする発想も、すでに触れたフリチ＝モドジェフスキの軍事改革論と共通する。他方で、ヴェレシチンスキのウクライナ植民論は、騎士団設立の提案にみられるように、植民地経営による国富の増大よりも、十字軍的な手法によってイスラム勢力に対抗することに重点が置かれており、発想が復古的であることは否めない<sup>78)</sup>。

キエフ司教の『公共の利益』の2年後、その問題提起を受けとめつつ、より世俗的で社会政策的な植民地経営論が、ウクライナから遠く離れたバルト海沿岸から提案される。その内容を、次に検討してみよう。

#### 4. ウクライナ植民論の系譜(2) — 軍事・農業植民論

ポーランド語で書かれた近世のウクライナ植民論のなかで、最も独創的で体系的な議論を展開しているのは、ピョートル・グラボフスキ Piotr Grabowski の『ポルスカ・ニジナ、あるいはポーランドの入植地』(1596年刊)<sup>79)</sup>である。著者グラボフスキは、共和国の北端、リガ湾に臨むインフランティの港町バルナヴァ Parnawa (現在ではエストニア共和国のピャルス Pärnu) の教区司祭であった。彼の経歴については、シュラフタの出身であること、外国滞在の経験があること、インフランティに所領をもっていることなどを除けば、残念ながらほとんどわかっていない<sup>80)</sup>。

黒海北岸の草原地帯から遠く離れたバルト海のほとりに暮らす人物がウクライナ植民にかんする提言を行うことに、私たちは奇異な印象を受ける。しかし、ポーランド貴族の入植の問題は、バルト海沿岸地域でも、けっして縁遠いものではなかった。リヴォニア騎士団の世俗化とインフランティの共和国への編入(1561年)にともなって、この地域にもシュラフタの進出の道が開かれ、じっさいに植民が進められていた<sup>81)</sup>。したがって、バルナヴァの司祭が、シュラフタの植民活動の実態を身近に観察し、その問題点と意義を実感しうる立場にいたとしても不思議ではない。とはいえ、裏づけとなる伝記的な史料が残されていない以上、これも推測の域を出るものではない。グラボフスキという人物については、さしあたり彼が書き残したテキスト以外に、私たちは判断の材料を持っていないのである。

グラボフスキは、ウクライナ植民論を発表する前年に、『一王国民の意見』*Zdanie syna koronnego* と題する論考を著している。そのなかで著者は、オスマン帝国の脅威からポーランドを守るために、一連の国力強化策を提言している。その構想は、軍事面では農民による選抜歩兵軍の編成、財政面では教会10分の1税の転用や関税の賦課による国庫収入の増強、外交面では反トルコ同盟の結成など多岐にわたるが、注目されるのは、輸出価格の高額設定や王権による穀物貿易の統制など、重商主義的な経済政策を提案している点である<sup>82)</sup>。イスラム勢力への対抗という問題意識と、国家による経済統制的な発想は、翌年の『ポルスカ・ニジナ』にも引き継がれており、その意味では、この2篇の論考は連続したものともみなすことができる。

タイトルにある「ポルスカ・ニジナ」(*Polska Niżna*)とは、「低地ポーランド」を意味するグラボフスキの造語であり、「ニジ Niżあるいはザドニエプシェ *Zadnieprze* [ドニエプル川左岸]におけるポーランドの新たな植民地 *nowe kolonia polskie*」<sup>83)</sup>を指す。本来、ポーラ

インド人の固有の領土ではないウクライナに、ポーランドの一部としての地域名を与えることは、まさしく植民地主義的な発想であるといつてよいであろう。

『ポルスカ・ニジナ』執筆の動機について、グラボフスキは次のように述べている。「子供から大人になって、よりしっかりとものごとを見ることができるようになるとまもなく、私は、タートルと呼ばれる人びとについて、聞いたり読んだりするようになった。彼らは異教を信じ、野蛮で、強大でもないのに戦いを好むという。この人びとが、われわれの国をかくもしばしば手ひどく荒らし、われわれの兄弟であるキリスト教徒を殺害し、奴隷として狩り集め、われわれの多くの同朋の誠実な娘や妻を辱め、われわれが牛を市場で売るように異教の国々で売り飛ばし、豊かなことでは約束の地にも似たわれわれの辺境の地域を獣の住む荒野に変えてしまうというのである。そのようなことを聞いたり読んだりするうちに、また他の人びととともに恐怖におののくうちに、私はこのことに少なからず心を痛めはじめた」<sup>84)</sup>。この異教徒の侵略への対抗策として、グラボフスキは、「国王陛下と共和国の財政にいかなる損失をもたらしことなく、国王陛下と共和国のあらゆる市民に大きな喜びをもたらす方法」を考え出した。彼は、この構想を書き下ろして国王に提出し、別の一部を出版業者に手渡した。ところが、このテキストが活字になる前に<sup>85)</sup>、キエフ司教ヴェレシチンスキのウクライナ植民論（『公共の利益』）が公刊された。先を越されるかたちになったグラボフスキは、それでもあえて自著の公表にふみきった理由を次のように説明している。「たいへん賢明に、また、自らの祖国に対する深慮と敬愛をもって書かれたこの〔ヴェレシチンスキの〕本を読んでみると、私が提案している方法は、キエフ司教殿が提起された7通りの提案<sup>86)</sup>のなかには表明されていないことに気づいた。そこで私は、あらためてこの私の小さな本を印刷に付して諸兄の知見に供し、キエフ司教殿の7つの方法に8番目の方法を付け加え、われわれの祖国全体を防衛し、数の増えたわれわれの同朋に糧をもたらすために、諸兄に新たな奮起を促そうと努めるにいたったのである」<sup>87)</sup>。

このように、『ポルスカ・ニジナ』は、著者の長年の思索を要約するだけでなく、先に刊行されたヴェレシチンスキのウクライナ植民論をふまえて、さらに新たな提言を付け加えることを意図して公刊されたのである。

先行する植民論との連続性は、たとえば窮乏したシュラフタに対する「約束の地」としてウクライナを位置づけている点に認められる。「シュラフタの家に生まれながら、パンのために自らの貴族の威信を捨て、あるいは都市民の、あるいは農民の、あるいはこれらと同類の隷属的な地位を受け入れ、たいへんな貧困のなかでぼろを身にまとい暮らしたり、やくざ稼業に糧を求めたりする者は数多い。没落して、そこから這い上がるすべをもたない者はたくさんいる。貧しいために物乞いをしたり、貧困の苦境のために死んでいく者もいる。自らの祖国に敵対する諸外国に身を寄せる者もいる。〔…〕上に挙げたような人びとはみな、疑いもなく、このポルスカ・ニジナに赴くであろう。そしてそこで、より誠実に、より満ち足りて、より喜ば

しく、より敬虔に生涯を送ることができるであろう」<sup>88)</sup>。

他方、先行する議論にはみられないグラボフスキの植民論の特徴は、カトリック護教的・軍事防衛的な意義だけでなく、植民地経営の経済的側面を重視している点である。「人は住んでいないが肥沃な土地は、ポーランド共和国のなかにきわめてたくさんある。王国民たち *synowie koronni* は、そこで、すばらしい所領を手にし、もし働き手 *robotnicy* と役牛が十分手に入れば、農業経営によって誠実に生きることができ、敵から被害をこうむることも防げるであろう。さらに、国境の向う側にも、占領するのに容易な地域が存在する。このような気概をもった王国民たちを、働き手と、敵に対抗する武力とともに、これらの人の住んでいない土地に導き入れ、そこにポルスカ・ニジナを設置すれば、それによってタタールに対する不断の守りを固めることができる」<sup>89)</sup>。ここで注目されるのは、「タタールに対する不断の守り」だけでなく、「農業経営によって誠実に生きる」可能性がうたわれている点である。ポルスカ・ニジナはたんなる十字軍的な軍事拠点ではなく、過剰人口に悩むシュラフタ層に開かれた領主経営の新天地としてイメージされているのである。

ポルスカ・ニジナは、制度的には、ポーランド王権のもとで、共和国の他の諸県と同一の法と特権を認められることになっていた。入植したシュラフタは、議会に代議員を派遣し、国王選挙にも参加する権利をもつ<sup>90)</sup>。県知事 *wojewoda*、城代 *kasztelan* などの官職も、他の諸県と同様に国王によって任命される。さらにポルスカ・ニジナに固有の官職として、異教徒との戦争にさいして臨時に任命される軍司令官 *hetman albo locumtenant*、農業植民地の開発と管理を担当する農場管理官 *ekonom*、王権との連絡役となる国王宮廷付き植民地担当官などが置かれる<sup>91)</sup>。住民は、シュラフタ・都市民・農民の3身分からなり、原則として「各人は、自分が生まれた身分にとどまる」が、都市民のうち、職人としての仕事にたずさわらず、武術に長けた者は、騎士層 *rycerstwo* に含めてもよいとされる<sup>92)</sup>。

ポルスカ・ニジナの支配階層である騎士層は、「家の父 *patres familiae* として、その生涯の営みにおいて優れた上級騎士 *rycerze przedniejszy* と、家の子 *filli familiae* として、その生涯の営みにおいて優れていない下級騎士あるいは二級の者 *rycerze mniejszy albo tyronowie*」の2階級に分かれる。上級騎士は、「ポルスカ・ニジナの本体そのもの」(*ipsum corpus Polski Niżnej*) であり、その「主要な構成員」(*essentialia menbra*) である。それに対して、下級騎士は、「新たにポルスカ・ニジナにやって来る者、あるいはこの地で生まれた若者」からなり、「騎士学校におけるように、国庫の費用で、訓練のために各地に配置される教師たちのもとで、共同で生活する」<sup>93)</sup>。下級騎士のうち優秀な者は上級騎士に昇格し、国王より土地を与えられる。また、都市民身分の出身者であっても、武勇に優れ、品位に欠けていなければ、シュラフタ身分に引き上げるよう、上級騎士から国王に推薦することができる<sup>94)</sup>。ポーランドの貴族は、巨額を費やして子弟をわざわざ外国に留学させる必要はない。ポルスカ・ニジナこそ

は理想的な軍事的鍛錬の場であり、むしろあらゆるキリスト教諸国民が子弟をウクライナに送ってくるであろう、とグラボフスキは主張する<sup>95)</sup>。

グラボフスキは、植民地の人口を確保するために、一種の社会保障的な提案もおこなっている。新規の到来者には1年間、衣食住が支給されるので、貧しいシュラフタの子弟でも、ポルスカ・ニジナで新たな生活に踏み出すことができる。また、結婚資金も国家が援助するので、貧しい男女も、安心して子作りに励むことができる<sup>96)</sup>。

このようなシステムは、騎士層の生計を支える広大な所領があってはじめて成立しうる。農場経営こそは、騎士にふさわしい誠実な営みであり、ポルスカ・ニジナに設立される学校も、騎士学校であると同時に農業経営を学ぶ場（rycerska i gospodarna szkoła）でもある<sup>97)</sup>。経営に必要な土地の確保については、グラボフスキはきわめて楽観的であった。騎士層の所領は、国王による王領地の貸与、有力者の寄進などによって取得されるが、異教徒の土地を軍事力によって占拠していけば、植民地はどこまでも膨張可能である。「彼らが数多く入植すればするほど、国庫に入る収入は大きくなり、入植可能な土地も、ますます広くなる。東方には、インドに至るまで、無人の土地や、零細な領主が住む土地がたくさんあり、希望をもってやって来る無数の人びとをそこに入植させることができる」<sup>98)</sup>。つまり、潜在的に取得可能な土地はウクライナから東方へ、インドに至るまで無尽蔵に広がっており、いったん入植がはじまれば、そこからさらなる植民地拡大のための原資を容易に引き出しうる、というのである。ここにあるのは、一種の富の無限増殖のイメージである。

それでは、植民地における労働力はどこから得られるのか。農場で働く賦役農民（robotnik, kmieć）は、労働によって騎士層に奉仕する従属的な階層であり、「ポルスカ・ニジナの本体 corpus には含まれない」。その供給源について、グラボフスキは次のように述べている。「農業経営のための働き手は、一部は、王国領で通常おこなわれているように、雇用 najmy によって、その他の世襲の農民 dziedziczni を連れてきたりし、一部は、国境を接する敵国からも数千人単位で獲得することになる。役牛も、タタールがわが国やモスクワでいつもそうしているように、敵国から奪い、法規にしたがって分配する。また、国王陛下は、浮浪者 hultaje、悪質な物乞い żebraki duższe、絞首刑に相当するほどの重い罪を犯していない平民 plebeji を、労働に投入することができる」<sup>99)</sup>。したがって、植民地の労働力は、王国領の中心部から連れてこられた賦役農民、軍事侵略によって獲得される捕虜、王国領から送り出される非定住者や犯罪者、という3つのカテゴリーの人びとから構成されることになる。さらに、異教徒の捕虜は、ポーランド国内やキリスト教諸国に売却することができる<sup>100)</sup>。これは、一種の奴隷貿易の構想とみることでもある。

ここで植民地が社会的規範から逸脱した人びとを収容する空間として位置づけられている点は、重要である。しかも、犯罪者の強制労働の場であるポルスカ・ニジナは、同時に犯罪なき



樂園としてもイメージされている。「殺人は、いっばんに、財産や世俗の威信をめぐる起きる。財産が平等であり、あるいは共有され、子孫についてそのように気をもむ必要もなく、それほど威張ったり、人との違いを誇示したりすることもないところでは、殺人は起こらないであろう。過度に肉欲がかきたてられたり、淫らになったりすることもありえない。なぜならば、各人が容易に結婚できるからである。飲酒も、度を越すことはあまりない。なぜならば、それほどしょちゅう酒を飲むべき理由がないからである。また、いかなる者も飲み過ぎる癖がつかないように配慮することは容易であり、もし何者かが道を踏み外したならば、その犯罪にふさわしい罰を受けるであろうからである」<sup>101)</sup>。このように、グラボフスキにとって、植民地の開発は、ポーランド社会の上層と下層がそれぞれ抱える社会問題（シュラフタの過剰人口、民衆の浮浪や犯罪）を一挙に解決する切り札でもあった。この点で、ヤヌシュ・グルスキが指摘するように、グラボフスキの構想が多分にユートピア的な性格を帯びていることは否定できない<sup>102)</sup>。

以上のように、グラボフスキのウクライナ植民論は、貧困シュラフタの救済策としての辺境植民、騎士学校の構想など、先行するフリチ＝モドジェフスキやヴェレシチンスキの提案を継承しながらも、植民地拡大の経済的側面や社会政策上の意義に着目して、より多角的で踏み込んだ議論を展開している。王権を頂点とする植民地の統治機構、上級騎士を「本体」とし賦役労働者を底辺とする植民地社会の階層構造、大農場を基盤とする生産体制と労働力編成など、軍事・農業植民地の設計図が、ここではじめて具体的なイメージをともなって描かれたのである。

しかし、このような植民地経営をめぐるさまざまな着想もまた、まったく先行するモデルをもたないところから生まれたわけではない。グラボフスキは、『ポルスカ・ニジナ』のなかで、次のようにも述べているのである。「他の諸国民は、広く世界中で繁栄し、力を強めている。ドイツ人は、ヨーロッパのあらゆる諸国で、商業や手工業や兵士の仕事によって、さらには農業によってさえ、繁栄している。トルコ人は、あらゆる世界で戦争で栄えている。タタールは、広く東方の諸国で繁栄している。モスクワは、北方の荒野で栄えている。スペイン人、イタリア人、イギリス人は、無限に広がる島々や海岸で、広大で豊かなインドで、繁栄している。われわれの国民は、世界でも優秀な国民のなかに数えられ、そしてもちろん広大に分布するスラヴ民族の筆頭に立っていながら、かくも無思慮であるために、住む家もあまり増えず、やっと少し増えた子弟たちも、タタールが捕まえて異教徒の諸国に売りさばくので、外国人のもとで無駄死にしていく」<sup>103)</sup>。トルコ、タタール、モスクワなど東方の勢力が西ヨーロッパの国々と同列に挙げられている点が独特ではあるが、グラボフスキが、西欧諸国による海外植民地の拡大を先行するモデルとして強く意識しながら、自らの植民論を構想したことはまちがいない。<sup>104)</sup>そして彼は、ウクライナの草原への進出こそ、ポーランドから「広大で豊かなインド」

に至るための、最も現実的で確実な一歩であると考えたのである。

## 5. 空間認識とプロパガンダ——結びにかえて

西欧諸国の海外への拡大を念頭におきながらポーランドの東方進出を説く言説は、17世紀にはいっても流通しつづける。

たとえば、パーヴェウ・パルチョフスキは『モスクワの贈り物、すなわちモスクワとの戦争の正当なる原因』（1609年刊）のなかで、東西インドに匹敵する富をモスクワ征服によって手にすることができると主張している。「たしかに、人びとが幸福を手にするのは、注意をめぐらし、働きかけることによってである。その明らかな証拠は、東と西のインドである。そこから来る船は、まるで気概と勇気と有能さによって並ぶ者なき人びとの徳に報いるかのように、高価な宝石や真珠や金銀を満載している。他方、われわれにとって、彼方のインドに向かうよりも、モスクワ国家に赴くほうが容易なことは、だれでも気がつくことである。そして、それ〔モスクワ〕を手に入れば、われわれもまた、勢力と豊かさにおいて、いかなるキリスト教の諸王国や民族とも肩を並べることができることであろう」<sup>105)</sup>。広大なペルーやメキシコが少数のコンキスタドールによって征服されたことを考えれば、モスクワ国家の巨大さは恐れるにたりない。「われわれは、戦う相手の数の多さを恐れるべきではない。力と強さは、人間が群れていたり人数が多かったりすることによるのではない。われわれは、数百人のスペイン人が数万人のインド人〔アメリカ原住民〕に勝利したことを知っているではないか。モスクワは、かの地の人びとよりは武器を持っているかもしれないが、戦場での勇猛さにおいてまさっているとも思えない」<sup>106)</sup>。

やや遅れて、シモン・スタロヴォルスキは、黒海北岸にポーランドの植民地（polska kolonia）を建設して東方との海上貿易の拠点とすることを説いた（1618年）。リガ湾に注ぐドヴィナ川とドニエプル川の支流ベレジナ川とのあいだを開削して運河でつなげば、「東洋を西洋と、黒海をバルト海と結ぶ」（złączyć Wschód z Zachodem i Morze Czarne z Bałtyckim）ことができる。「オランダ人がアジアや日本に向かったのみならず、スペイン人もまた、アフリカの海に無駄に足をとめることなく、自らの新しいインドに向かっているのであるから、どうしてわれわれも収益を求めずにいられようか」<sup>107)</sup>。

以上にみてきたように、16世紀前半のマチエイ・ズ・ミエホヴァから17世紀前半のスタロヴォルスキにいたるまで、東方への進出を説く言説のなかで、「新世界」にかんする情報は、2つの機能をはたしていたと考えることができるであろう。ひとつは、西欧諸国によってすでに進められている空間的拡大の先行例を示すという意味での例示的な機能、もうひとつは、共和国の東方（共和国内の東部辺境地域と、共和国の東に隣接する地域の双方を含む）にポーランド人

自身にとっての植民地空間が広がっていることに気づかせるという意味での発見的な機能である。ルネサンス期にさまざまな経路をつうじてもたらされた新しい空間認識は、共和国の支配層の政治的言説のなかに取り込まれ、これら2つの機能をつうじて、領土拡張的な主張を正当化する論拠を提供したのである。

西欧諸国の海外進出に言及しながら自国の対外膨張を説くプロパガンダの手法は、シュラフタのあいだにある程度「地理上の発見」の知識が普及していることを前提にしている。他方で、東方への拡大を説くこれらの言説は、シュラフタ社会のなかで現実にとれほどの動員力をもったのだろうか。ヤレマ・マチシェフスキやヴィワディスワフ・チャプリンスキら従来の研究者は、この時期の一連の膨張主義的プロパガンダのじっさいの効果については、むしろ否定的である<sup>108)</sup>。ヤヌシュ・タズビルもまた、総じてシュラフタの多くは共和国の軍事的拡大には消極的であり、スペインのコンキスタドールは、一部の論者を除けば、シュラフタにとっての理想にはならなかったという<sup>109)</sup>。じっさい、いわゆる「偽ドミトリー問題」を契機とするモスクワへの軍事的膨張（1604–1612年）は一時的なものに終わり、持続的な植民の足がかりを築くにはいたらなかった。

しかし、ウクライナにかんしては、状況はやや異なる。ウクライナ（キエフ県、ブラツワフ県）への貴族の入植の実態を数量的に分析したヘンリク・リトヴィンの研究<sup>110)</sup>によれば、ルブリン合同（1569年）以降にはじまるポーランド系の貴族のこの地域への入植は、17世紀初頭からむしろ本格化する<sup>111)</sup>。王権がこの地域の王領地や官職をポーランド系の大貴族に優先的に配分した結果、彼らの影響力のもとにある下層貴族もウクライナに進出する足がかりをつかんだ<sup>112)</sup>。中・下層の貴族のなかには、地方官職を取得し、在地貴族との姻戚関係をつうじてウクライナ社会に同化していく者もあらわれる。他方、ポーランドからの入植者が増えるにつれて、ウクライナ社会のカトリック化も進んだ<sup>113)</sup>。結果的に、1640年代末には、ウクライナの貴族社会——とくにその最上層と最下層——において、ポーランド系貴族は無視しえない勢力となるにいたった<sup>114)</sup>。

ヴェレシチンスキやグラボフスキのウクライナ植民論が、リトヴィンのいうウクライナ植民の本格的展開（17世紀初頭以降）が始まる直前に公開されていることは、興味深い符合である。リトヴィンの研究が個々の貴族のモチヴェーションの分析に踏み込んでいない以上、私たちは、政治的プロパガンダが現実のウクライナ植民の進展におよぼした影響について語ることは慎重でなければならない。ただ、ヴェレシチンスキのように教権的・十字軍的な方向に向かうか、グラボフスキのように農業開発的・社会政策的な方向に向かうかを問わず、この時期のウクライナ植民論が、人口圧に悩むシュラフタ社会のなかで芽生えつつあった膨張主義的な欲望に根差したものであったことはまちがいないであろう。

もうひとつ、東方植民を説く言説をウクライナ社会の実態と重ね合わせることによって浮か

び上がってくる問題がある。それは、一連の東方植民論に共通してみられる、現地の正教徒社会への関心の希薄さである。フリチ＝モドジェフスキからスタロヴォルスキにいたるまで、植民推進論者の多くは、タタールやオスマン帝国などイスラム勢力との軍事的対決を念頭において東方への勢力拡大を主張してきた。そのさい、共和国の東に広がる空間はしばしば無人の沃野であるかのように語られ、そこで正教徒の農民やコサックが生活を営んでいることはほとんど視野の外に置かれているのである<sup>115)</sup>。カトリックのポーランド貴族による植民が現地の正教徒社会の内部に引き起こす宗教的・社会的な摩擦や緊張の増大に無自覚である点に、この時期の東方植民論の共通した特徴がみとめられる。

共和国の支配層にとって、この視点の欠落の代償は大きかったといわねばならない。ポーランド系貴族による領主支配の強化とカトリック化の圧力に対するウクライナ在地コサック・農民社会の不満は、やがて1648年のフメルニツキーの蜂起となって爆発するのである。

- 1) 従来から比較的良好に知られているのは、16世紀以降のモスクワ国家のカザフ、シベリアへの進出である。ただし、イマニュエル・ウォーラーステインによれば、18世紀以前のロシアは近代世界システムの外部に位置しており、したがってこの時期のモスクワ国家の領域拡大は「ヨーロッパ世界経済」の東方への拡大ではなく、「ロシア世界経済」の独自の拡大とみなされる。I. ウォーラーステイン (川北稔訳)『近代世界システム——農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立——』, II, 岩波書店, 1981年, 213-221, 225-236頁 [Immanuel Wallerstein, *The Modern World-System I: Capitalist Agriculture and the Origins of the European World-Economy in the Sixteenth Century*, New York-San Francisco-London 1974, pp. 301-309, 313-324] を参照。なお、以下で紹介するマリアン・マウウォヴィストは、ロシアの東方拡大を「ヨーロッパにおける拡大運動」のひとつとして扱っている。
- 2) Marian Małowist, "Un essai d'histoire comparée : les mouvements d'expansion en Europe aux XV<sup>e</sup> et XVI<sup>e</sup> siècles", *Annales E.S.C.* (1962), pp. 923-929. Id., *Croissance et régression en Europe XIV<sup>e</sup>-XVI<sup>e</sup> siècles*, Paris 1972, pp. 217-223に再録。本稿では以下、初出の頁数を示す。
- 3) *Ibid.*, pp. 925-927.
- 4) Marian Małowist, "Europe de l'Est et les pays ibériques. Analogies et contrastes", in: *Homenaje a Jaime Vicens Vives*, t. I, Barcelona 1965, pp. 85-93 [ポーランド語訳は, M. Małowist, "Europa Wschodnia i kraje iberyjskie. Podobieństwa i kontrasty", w: Id., *Europa i jej ekspansja XIV-XVII w.*, wybór artykułów i wstęp Antoni Mączak, redakcja naukowa Hanna Zaremska, Warszawa 1993, s. 134-143] .
- 5) *Ibid.*, p. 85, 87-88, 91-92 [s. 134, 137, 141-142] . 相違点としては、イベリア半島では国家の中央集権化が進んだのに対し、ポーランドではむしろ貴族共和制による分権化が進んだことが指摘されている。*Ibid.*, p. 93 [s. 143] .
- 6) Joachim Lelewel, *Historyczna paralela Hiszpanii z Polską w XVI, XVII, XVIII wieku*, w: Id., *Dzieła*, Tom VIII: *Historia Polski nowożytnej*, opracowali Józef

- Dutkiewicz, Marian H. Serejski, Helena Więckowska, Warszawa 1961, s. 215-263. 1831年にワルシャワで公刊されたこの著作は、19世紀中にさらに2版を重ね（1845・1855年、出版地はともにボズナン）、ドイツ語訳（1834年）、フランス語訳（1863年）、ロシア語訳（1863年）も出版されている。19世紀のポーランドにおける対スペイン比較論の特徴については、Jan Kieniewicz, “L’Espagne comme un modele positif et négatif des Polonais au XIX<sup>e</sup> siècle: continuité et discontinuité dans la mythologie nationale polonaise”, *Acta Poloniae Historica*, 58 (1988), pp. 51-79を参照。
- 7) 史学史上の意義については、Marian Henryk Serejski, *Koncepcja historii powszechnej Joachima Lelewela*, Warszawa 1958, s. 369-395を参照。
- 8) Lelewel, *op. cit.*, s. 230.
- 9) 両大戦間期までの研究状況については、J. Morawski, “Espagne et Pologne. Coup d’oeil sur les relations des deux pays dans le passé et le présent”, *Revue de littérature comparée*, 16 (1936), pp. 225-246を参照。
- 10) Ervin C. Brody, “Spain and Poland in the age of the Renaissance and the Baroque: a comparative study”, *The Polish Review*, 15-4 (1970), pp. 86-105 and 16-1 (1971), pp. 53-107.
- 11) Janusz Tazbir, *Szlachta a konkwistadorzy. Opinia staropolska wobec podwoju Ameryki przez Hiszpanię*, Warszawa 1969 [以下, *Szlachta a konkwistadorzy* と略記]; Id., *Rzeczpospolita szlachecka wobec wielkich odkryć*, Warszawa 1973 [以下, *Wobec wielkich odkryć* と略記]; Id., “Sarmaci a konkwistadorzy”, w: *Sąsiedzi i inni*, Warszawa 1978, s. 129-148.
- 12) ウォーラーステイン, 前掲書, xxv 頁 [Wallerstein, *op. cit.*, p. xi]。
- 13) 以下, ポーランド王国とリトアニア大公国, および両国に服属する諸公国からなる複合国家全体を指す場合には, 「共和国」と表記する。
- 14) ポーランドも含めて, ヨーロッパ諸国の植民論の類型的比較については, Stanisław Grzybowski, “The Gentry and the Beginnings of Colonization”, in: *La Pologne au XIV<sup>e</sup> Congrès International des Sciences Historiques à San Francisco*, Wrocław 1975, pp. 23-43が示唆的である。
- 15) Janusz Tazbir, “La connaissance de l’Amérique chez les habitants de la République nobiliaire aux XVI<sup>e</sup>-XVII<sup>e</sup> siècles”, *Acta Poloniae Historica*, 60 (1989), p. 7. ラテン語によるコロンブスの書簡の初版（1493年刊）も東中欧各地の図書館に所蔵されているが, これらは刊行時点よりもかなり遅れて伝来した可能性がある。Id., *Polska sława Krzysztofa Kolumba*, Warszawa 1991 [以下, *Kolumb* と略記], s. 11.
- 16) Romuald Wróblewski, “Nowy Świat – Indie Zachodnie – Ameryka. Z dziejów kształtowania się polskiej nomenklatury geograficznej w dobie Renesansu”, *Odrodzenie i Reformacja w Polsce*, 21 (1976) [以下, *Nomenklatura geograficzna* と略記], s. 42.
- 17) Bolesław Olszewicz, “Geografia polska w okresie Odrodzenia”, w: *Odrodzenie w Polsce*, Tom II: *Historia nauki*, Część II, pod red. Bogdana Suchodorskiego, Warszawa 1956, s. 340.
- 18) この著述は刊行には至らなかった。Janusz Tazbir, “Europa środkowowschodnia wobec

- “odkrycia Ameryki””, *Kwartalnik Historyczny*, 98-4 (1991) [以下, *Europa środkowo-wschodnia*と略記], s. 23.
- 19) 『ヨハネス・デ・サクロボスコの地球論への簡潔な入門』*Introductorium compendiosum in Tractatum sphere materialis magistri Ioh. de Sacrobusto* としてクラクフの出版業者ヤン・ハレルより同年に刊行された。
- 20) Franciszek Bujak, *Studia geograficzno-historyczne*, Warszawa-Kraków-Lublin-Łódź-Poznań-Wilno-Zakopane 1925, s. 65より引用。
- 21) ヴァスコ・ダ・ガマの最初の東インド航海からの帰還は1499年10月, 2度目の帰航は1503年10月である。また, カブラルのブラジル航海からの帰還は1501年半ば, アルブケルケの東インドからの帰航は1504年10月であった。ヤン・ズ・グウォゴヴァがいずれの航海を念頭においているのかは明らかでない。Bujak, *op. cit.*, s. 65-66.
- 22) *Ibid.*, s. 66; Olszewski, *op. cit.*, s. 339-340; Romuald Wróblewski, *Znajomość Ameryki w Polsce okresu Odrodzenia*, Warszawa 1977 [以下, *Znajomość Ameryki*と略記], s. 21-22. 他方, タズビルは, この記述を, 東西両インドを念頭においたものとみなしている。Tazbir, *Wobec wielkich odkryć*, s. 14.
- 23) Wróblewski, *Znajomość Ameryki*, s. 22.
- 24) 『コペルニクス・天球回転論』(高橋憲一訳・解説), みすず書房, 1993年, 20頁〔訳文一部変更〕。
- 25) Wróblewski, *Znajomość Ameryki*, s. 81; Tazbir, *Kolumb*, s. 17.
- 26) Marcin Bielski, *Kronika wszytkiego świata* (Kraków 1564), przedruk techniką fotooffsetową, Warszawa 1976, Rozdział Pierwszy Ksiąg Dziesiątych “O żeglowaniu Krysztofa Kolumbusa”, list 440 verso-443 verso.
- 27) *Ibid.*, list 443 recto-443 verso.
- 28) *Ibid.*, list 442 recto, 445 verso.
- 29) *Ibid.*, list 445 recto. この箇所には, ゼバスティアン・ミュンスター『世界誌』から転用した食人種の図版が添えられている。
- 30) 16世紀末に書かれたアンジェイ・ズビリトフスキAndrzej Zbylitowskiの詩句は, 読者がこの『年代記』に何を期待していたかをよく示している。「気高きビエルスキよ, あなたの努力のおかげで／いまや誰でも自分の家に坐ったままで／アジアや北の国々や／ヨーロッパ, アフリカ, ベルシアの強国で何が起っているかを知ることができる」。Tazbir, *Wobec wielkich odkryć*, s. 21より引用。
- 31) Tazbir, *Szlachta a konkwistadorzy*, s. 16-17. ロシア語訳は手稿にとどまった。Id., *Europa środkowowschodnia*, s. 25.
- 32) Ignacy Chrzanowski, *Marcin Bielski. Studium literackie*, Warszawa 1906, s. 67, 121-123.
- 33) Tazbir, *Wobec wielkich odkryć*, s. 20.
- 34) *Ibid.*, s. 21-22.
- 35) Alojzy Sajkowski, “Znajomość włoskiej literatury geograficzno-podróżniczej w Polsce. Ramusio, Botero”, w: Id., *Opowieści misjonarzy, konkwistadorów, pielgrzymów i innych świata ciekawych*, Poznań 1991, s. 70-73.
- 36) *Ibid.*, s. 72-73より引用。

- 37) ウェンチツキは、この翻訳の第5巻をパーヴェウ・ムニシェフ Paweł Mniszech に献呈している。ムニシェフは、ツァーリの継承をめぐる混乱に乗じてポーランドがモスクワに軍事介入した「偽ドミトリー事件」の首謀者のひとりであった。Tazbir, *Szlachta a konkwistadorzy*, s. 86.
- 38) ダンティシェクの外交官としての活動については, Zbigniew Nowak, *Jan Dantyszek. Portret renesansowego humanisty*, Wrocław-Warszawa-Kraków-Gdańsk-Lódź 1982, s. 107-156を参照。
- 39) Wróblewski, *Znajomość Ameryki*, s. 30.
- 40) Władysław Pociecha, *Królowa Bona (1494-1557). Czasy i ludzie Odrodzenia*, Tom IV, Poznań 1958, s. 231, 397.
- 41) Tazbir, *Wobec wielkich odkryć*, s. 115-119.
- 42) 16世紀のポーランド人の西欧留学を統計的に考察した研究としては、さしあたり次のものを参照。Dorota Żołądz-Strzelczyk, *Peregrinatio academica. Studia młodości polskiej z Korony i Litwy na akademiach i uniwersytetach niemieckich w XVI i pierwszej połowie XVII wieku*, Poznań 1996; Zdzisław Pietrzyk, *W kręgu Strasburga. Z peregrynacji młodości z Rzeczypospolitej polsko-litewskiej w latach 1538-1621*, Kraków 1997.
- 43) *Antologia pamiątek polskich XVI wieku*, pod red. Romana Pollaka, wybór i opracowanie Stanisław Drewniak i Marian Kaczmarek, Wrocław-Warszawa-Kraków 1966, s. 157.
- 44) カトリック側には、海外の布教地は、宗教改革による失地の代償として神が与えたものであるという考え方があった。ポーランド・カトリック教会の論者のひとり、ベネディクト・ヘルベスト Benedykt Herbest は、次のように述べている。「ドイツ人やハンガリー人が信仰から離れ、ポーランド人も一部がこれらの者どもに手を貸しはじめている。これに対して、主なる神はどうされたか。インドや、他の新しい島々や地域や諸国で多くの人びとをお選びになり、ご恩寵を施されたのである」。Wróblewski, *Znajomość Ameryki*, s. 38より引用。
- 45) Tazbir, *Wobec wielkich odkryć*, s. 24.
- 46) Wróblewski, *Znajomość Ameryki*, s. 44より引用。
- 47) Tazbir, *Szlachta a konkwistadorzy*, s. 19-20; Stanisław Bednarski, *Upadek i odrodzenie szkół jezuickich w Polsce. Studium z dziejów kultury i szkolnictwa polskiego*, Kraków 1933, s. 432.
- 48) 1624年と1627年の宗教行列の演出。Tazbir, *Szlachta a konkwistadorzy*, s. 21.
- 49) Wróblewski, *Znajomość Ameryki*, s. 33-45。プロテスタント諸宗派による「新世界」認識の普及については, *Ibid.*, s. 46-50; Tazbir, *Wobec wielkich odkryć*, s. 25-26, 81-85.
- 50) 「新世界」は、17世紀初めまで、かならずしもアメリカ大陸を指すとは限らず、インド亜大陸、中国、日本を含む意味でも用いられた。「インド」も、しばしば「新世界」・「アメリカ」と互換的に用いられている。Wróblewski, *Nomenklatura geograficzna*, s. 43-54; *Id.*, *Znajomość Ameryki*, s. 95-105.
- 51) Mathias de Miechow, *Tractatus de duabus Sarmatiis, Asiana et Europiana et de contentis in eis*, [Cracoviae] 1517, A<sup>1</sup>.
- 52) ルネサンス期の「サルマチア」論については、拙稿「サルマチア——ヨーロッパにおけるポー

- ランドのトボス」、『洛北史学』, 2 (2000年), 18-21頁を参照。
- 53) Wróblewski, *Znajomość Ameryki*, s. 36.
- 54) *Listy ks. Piotra Skargi T. J. z lat 1566-1610*, podług autografów wydał i objaśniał ks. Jan Sygański T. J., Kraków 1912, s. 55.
- 55) 1579年9月30日付。Tazbir, *Szlachta a konkwistadorzy*, s. 96より引用。
- 56) ウクライナ Ukraina は、14世紀後半にリトアニア大公の支配下にはいり、1569年のルブリン合同議会においてリトアニア大公国領からポーランド王国領に編入された。
- 57) ここでは、ルブリン合同議会 (1569年) 以前からポーランド王国領に属するルシ・チェルヴォーナ Ruś Czerwona, ポドレ Podle, ルブリン合同議会以降ポーランド王国領となったヴォウイン Wołyn, ウクライナの各地域を総称して「東南部辺境地域」と呼ぶことにする。
- 58) *Zarys dziejów wojskowości polskiej do roku 1864*, Tom I: *Do roku 1648*, Warszawa 1965, s. 280-282.
- 59) *Ibid.*, s. 300-301.
- 60) 「領地の執行」(egzekucja dóbr) と呼ばれるこの改革の概要については、さしあたり Anna Sucheni-Grabowska, “Społeczność szlachecka a państwo”, w: *Polska w epoce Odrodzenia. Państwo, społeczeństwo, kultura*, pod red. Andrzeja Wyczańskiego, wyd. II, Warszawa 1986, s. 55-75を参照。
- 61) フリチ=モドジェフスキの軍事・財政改革構想の全体像については、拙稿「16世紀ポーランドのふたつの戦争論」, 『人文学報』(京都大学人文科学研究所), 78 (1996年), 10-18頁を参照。
- 62) Andreus Fricius Modrevius, *Opera omnia*, Vol. I: *Commentariorum de Republica emendanda libri quinque*, edidit C.Kumaniecki, Warszawa 1953, p. 232.
- 63) Iannis Mączyński, *Lexicon Latino-Polonicum* (1564), edidit Reinhold Olesch, Köln-Wien 1973, p. 723.
- 64) *Ibid.*, p. 119.
- 65) Józef Wereszczyński, *Pisma polityczne*, wyd. Kazimierza Józefa Turowskiego, Kraków 1858, s. 3.
- 66) *Ibid.*, s. 5.
- 67) *Ibid.*, s. 10.
- 68) *Ibid.*, s. 3-4, 6-7.
- 69) *Ibid.*, s. 10-11.
- 70) ポーランド王国領の東南方辺境に騎士団を置く発想自体は、新しいものではない。すでに15世紀末に、ヴァルミア司教ウカシュ・ヴァッツェンローデ Łukasz Watzenrode は、プロイセンのドイツ騎士団をポドレないしモルダヴィアに移転することを提案していた。Grzybowski, *op cit.*, p. 24.; Marian Biskup, Gerard Labuda, *Dzieje zakonu krzyżackiego w Prusach. Gorpodarka-społeczeństwo-państwo-ideologia*, Gdańsk 1986, s. 465
- 71) *Ibid.*, s. 13.
- 72) *Ibid.*, s. 18.
- 73) *Ibid.*, s. 14.
- 74) 共和国内に居住する宗教的マイノリティに対するヴェレシチンスキのまなざしは猜疑心に満ちており、きわめて差別的である。ユダヤ人は「神とわれわれの主たる敵」、ロマは「盗人で、しかも追放された者」とみなされ、ユダヤ人に仕えるキリスト教徒もユダヤ人と同様に罰するべきで



- あるとされる。また、アルメニア人はキリスト教徒であるにもかかわらず、「共和国の富をトルコ、ワラキア、モスクワに密輸する裏切り者」とみなされている。*Ibid.*, s. 19.
- 75) *Ibid.*, s. 29-31.
- 76) *Ibid.*, s. 20-21.
- 77) 前掲拙稿, 12-13頁, および拙稿「16世紀のポーランドにおけるテオクラシー的国家観 — スタニスワフ・オジェホフスキの晩年の著作をめぐる —」, 『史林』, 77-3 (1994年), 12-13, 15頁を参照。
- 78) ヴェレシチンスキは, 「キリスト教徒の喜びのため, 異教徒の辱しめのために, 汝を授く」という天の声の響きとともにこの世に生を受けたと自ら記すなど, 預言者的な自意識の持ち主でもあった。*Ibid.*, s. 16.
- 79) 本稿では, Piotr Grabowski, *Polska Niżna, albo osada polska*, wydanie Kazimierza Józefa Turowskiego, Kraków 1859 [以下, *Polska Niżna*と略記] を参照した。なお, 『ポルスカ・ニジナ』の抜粋は, *Merkantylistyczna myśl ekonomiczna w Polsce XVI i XVII wieku. Wybór pism*, wyboru dokonali Janusz Górski i Edward Lipiński, wstępem opatrzył Edward Lipiński, Warszawa 1958 [以下, *Merkantylistyczna myśl ekonomiczna*と略記], s. 35-81にも収められている。
- 80) Danuta Maniewska, “Grabowski Piotr (zm. w 1625 r.)”, *Polski Słownik Biograficzny*, Tom VIII, Wrocław-Kraków-Warszawa 1959-1960, rpt. Wrocław 1990, s. 507.
- 81) Andrzej Wyczański, *Polska Rzeczą Pospolitą szlachecką*, wyd. II poprawione, Warszawa 1991, s. 234-235.
- 82) Piotr Grabowski, *Zdanie syna koronnego (r. 1595)*, wydanie Kazimierza Józefa Turowskiego, Kraków 1858. 抜粋が *Merkantylistyczna myśl ekonomiczna*, s. 11-33 に収められている。グラボフスキのポーランド経済思想史における位置づけについては, Janusz Górski, *Poglądy merkantylistyczne w polskiej myśli ekonomicznej XVI i XVII wieku*, Wrocław-Warszawa 1959, s. 112-116; Edward Lipiński, *Historia polskiej myśli społeczno-ekonomicznej do końca XVIII wieku*, Wrocław-Warszawa-Kraków-Gdańsk 1975, s. 168-171を参照。
- 83) Grabowski, *Polska Niżna*, s. 18.
- 84) *Ibid.*, s. 7.
- 85) グラボフスキは, 自分がモスクワに行って留守にしている間に出版業者が仕事を放置したため刊行が遅れたと説明している。*Ibid.*, s. 10. このモスクワ行きの目的や経緯は不明である。
- 86) ヴェレシチンスキの『公共の利益』は, 7章(7つの方法 [sposób])から構成されている。
- 87) Grabowski, *Polska Niżna*, s. 9-10.
- 88) *Ibid.*, s. 44.
- 89) *Ibid.*, s. 12.
- 90) *Ibid.*, s. 30.
- 91) *Ibid.*, s. 18-19.
- 92) *Ibid.*, s. 19-20.
- 93) *Ibid.*, s. 21.
- 94) *Ibid.*, s. 22.
- 95) *Ibid.*, s. 54-55.

- 96) *Ibid.*, s. 20-22, 50, 56-57.
- 97) *Ibid.*, s. 50-51, 57.
- 98) *Ibid.*, s. 13.
- 99) *Ibid.*, s. 12-13.
- 100) *Ibid.*, s. 36.
- 101) *Ibid.*, s. 32.
- 102) 無論, それは, 支配身分であるシュラフタにとってのユートピアである。Górski, *op. cit.*, s. 116.
- 103) Grabowski, *Polska Niżna*, s. 55.
- 104) たとえば, グラボフスキの植民論に10年ほど先立って, イングランドでも, 人口過剰と犯罪の増加を一挙に解決する方策として新大陸への植民が提唱されている。リチャード・ハクルート「西方植民論」〔1584年執筆〕(越智武臣訳), 『イギリスの航海と植民 2』(大航海時代叢書第Ⅱ期 18), 岩波書店, 1985年, 60-64頁。ただし, この著作そのものは19世紀まで公開されておらず, グラボフスキが直接参照した可能性は低い。
- 105) Paweł Palczowski, *Koleśa moskiewska, to iest wojny moskiewskiej przyczyny skuszone ...*, Kraków 1609, s. B<sub>2</sub><sup>a</sup>-B<sub>3</sub><sup>b</sup>.
- 106) *Ibid.*, s. F<sub>3</sub><sup>b</sup>.
- 107) Szymon Starowolski, *Pobudka abo rada na zniesienie Tatarów perekopskich* (1618), w: Id., *Wybór z pism*, przekład tekstów łacińskich, wybór i opracowanie Ignacy Lewandowski, Wrocław-Warszawa-Kraków 1991, s. 158, 173-174.
- 108) Jarema Maciszewski, *Polska a Moskwa 1603-1618. Opinie i stanowiska szlachty polskiej*, Warszawa 1968, s. 307-308; Władysław Czapliński, "Propaganda w służbie wielkich planów politycznych", w: *O Polsce siedemnastowiecznej. Problemy i sprawy*, Warszawa 1966, s. 164-200.
- 109) Tazbir, *Szlachta a konkwistadorzy*, s. 87.
- 110) Henryk Litwin, *Napływ szlachty polskiej na Ukrainę 1569-1648*, Warszawa 2000.
- 111) *Ibid.*, s. 66-67, 160-161.
- 112) *Ibid.*, s. 121-122.
- 113) *Ibid.*, s. 156-159.
- 114) *Ibid.*, s. 162.
- 115) グラボフスキは, ポルスカ・ニジナの騎士層に吸収することによってコサックも統制できると考えていた。Grabowski, *Polska Niżna*, s. 57. しかし, これは彼のウクライナ植民論全体のなかでは, 副次的な論点に過ぎない。

〔本稿は, 平成12年度科学研究費基盤研究(C)(2)による研究成果の一部である。また, 研究を進めるうえで, 京都大学人文科学研究所共同研究「空間と移動の社会史」(1998~2000年度, 班長: 前川和也)における諸報告・討論から多くの示唆をえた。〕